

2024年5月 19日 久宝教会 聖霊降臨日(ペンテコステ)礼拝メッセージ

「立場から解き放たれて」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 2章 1-13節

今日は「ペンテコステ(聖霊降臨日)」です。「ペンテコステ」というのは、「50 番目」「50 日目」という意味のギリシャ語ですから、「使徒言行録」2 章 1 節では、その日に行われたお祭りの名前が「五旬祭(ごじゅんさい)」と訳されています。ですが、もともとはユダヤ教の「七週祭」というお祭りでした。この季節は古代イスラエルでは小麦の収穫の季節だそうで、約 2 ヶ月前の「過越の祭」の際に大麦に鎌を入れ、その後 7 週間をかけて大麦と小麦の収穫を行い、最後に鎌納めのお祭りとして「七週祭」が行われました。

「過越祭」も「七週祭」も、「ヘブライ語聖書」に基づいて、古くから行われていたユダヤ教のお祭りでした。そして、その「過越祭」の時にイエス様は十字架に架けられ、7 週間後の「七週祭」「五旬節」の時に、残された弟子たちの上に聖霊が降って、教会が誕生したと言われています。そのためにキリスト教では、「イースター」に引き続いてこの日を「ペンテコステ(聖霊降臨日)」として特別にお祝いしています。

今回の聖書のお話は、まさにその「七週祭」「五旬節」のお祭り、皆が集まっていた場面で起こった出来事のお話でした。彼らが座っていると、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話した」(2-4 節)とのことですから、具体的に何が起こったのかはよく分かりません。外からその様子を覗いた人たちの中には、「あの人たちは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言う人もいたようです(13 節)。ですから、傍目から見ても、たいそう不思議な光景だったのでしょ。

この後に続く 15 節ではペトロが「今は朝の9時ですから、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではありません」と弁明しています。彼らは夜通しお酒を飲んでいただけではなさそうですが、大きなお祭りの最中ですし、町の

あちこちにはお酒に酔っ払って、耳慣れない言葉を口にしていた人たちの姿が大勢見られていたのかもしれませんが。

私は一昨日も京都へ行く用事がありましたが、電車の乗り換えのために京都駅で降りると、そこには外国人旅行者の方々がたくさんおられました。コロナ禍の間は制限がありましたが、コロナ禍が明けた昨年からは急増し、今では折からの円安のせいもあって、電車の中は大きな荷物を抱えた外国人の旅行者の方々がいっぱいです。体の大きさも肌の色も様々ですし、聞こえてくる言葉も、英語や中国語だけではなく、聞いたことのないような言葉も耳に入って来ます。世界中の様々な所から、京都に観光に来られているのだと思います。

「インバウンド需要」という言葉がニュースでも取り上げられるようになってから、「お客様」としての外国からの来日旅行者の方々に対して、多くの人々の目が向けられるようになったかと思います。電車内のアナウンスも、駅の看板も複数の言語で流されたり、表示されていたりするようになりました。それでもまだ日本は難民・移民の受け入れが、世界最低水準ですし、外国からの留学生の数も、労働者の数も圧倒的に少なく、またそれらの方々の権利が十分に守られているとは言い難い状況も続いています。それらは「昔から日本列島には日本人しかいなかった」というような差別と偏見による事実誤認の感覚に基づいているのだらうと思います。見る目と聞く耳さえ持っていれば、大昔からこの列島の中に共に暮らして来られた「外国人」とされて来た「少数派」の方々の姿や声と、もっと以前から出会うことが出来たはずです。むしろ、問い直されるのは、「多数派」とされる人たちの、見る目や聞く耳の方なのではないでしょうか。

弟子たちの上に聖霊が降ったペンテコステの当時も、エルサレムの都には世界中のあちこちから様々な人々が集まって来ていたとのことでした。「週報」には地図を載せておきましたが、遠くはローマ、エジプト、メソポタミアなど、何百キロ、何千キロも離れた国や町から、仕事のためや巡礼のために、大勢の人々がエルサレムの都に集まって来ていました。そのような様々な人々が何語でコミュニケーションをとっていたのかは分かりませんが、恐らくはギリシャ語であったり、ヘブライ語であったりしたのでしょうか。聖書の中には「ギリシャ語を話すユダヤ人」という表

現がありますから、逆に言うと「ギリシャ語を話さないユダヤ人」も多かったわけですし、イエス様や弟子たちはその言葉遣いだけで「ガリラヤの人」だと分かったようです(マタイ 26:73)から、ヘブライ語やアラム語の中でも、いわゆる「方言」も沢山あったのではないかと想像します。

何百キロ、何千キロも離れた土地から集まって来た人々をつなげていたのは血でもなければ、肌の色でもなく、ひとえに「ユダヤ人」「ユダヤ教徒」であるということであり、つまりは「ユダヤ教の律法を守る」ということだけでした。そのような社会状況の中で、このペンテコステの日に、エルサレムに住む人々はそれぞれの出身地、「生まれ故郷の言葉」を聞きました。聞くはずがないと思っている所で、それらの言葉を聞いたのです。それは、弟子たちの上に聖霊が降ったことによって、彼らは超能力者として目覚め、それまで学習したことがなかった外国語を、一瞬にして流暢に話せるようになった、ということではありません。むしろ「聞く側の耳が開かれた」ということなのではないでしょうか。つまり、ユダヤ人として、ユダヤ教徒らしく、律法を守らなければならない。ヘブライ語やギリシャ語が理解できないといけなく、というのではなく、それぞれが自分たちの言葉で神の偉大な業を語ればよい、語る事ができ、聞くことができるということに気付くことができた、ということなのではないかと思えます。

「ペンテコステは、『聖霊』が降った日です」とは言いながら、「では聖霊とは何ですか」と言われると、目で見ることでも手で触ることも出来ないもので、困ってしまいます。3節には「炎のような舌が一人一人の上に留まった」と記されていますから、赤い炎や、また2節にあるように激しい風、また「創世記」の天地創造の物語から、神の息、命の息吹、またイエス様が洗礼者ヨハネによってヨルダン川に沈められた時に、霊が鳩のように下って来たこと(マルコ 1:10)から、鳩がシンボルとされたりしていますが、要するに「形としてはよく分からない」というのが最適なのでしょう。

来週は「三位一体主日」です。「父・子・聖霊」を言い換えて、「見えない神、見える神、感じる神」という表現もありました。今日、最初に歌った賛美歌「世の初め、鳥のように」の中にも、「全てのものに命を与え、養い育て、心を開かせ、自由へと

導き、無感動や無関心を越えて、愛に生きさせてくれる」存在、それが聖霊だと歌われていました。ですから、たとえ姿かたちは見えなくて分からなくても、確かに存在し、私たちに働きかけてくれるもの。それが聖霊なのではないでしょうか。

そのような聖霊によって力付けられ、励まされる時、私たちは「こうしなければ、こうあらねばならない」「そんなことあるはずがない」という立場から解き放たれて、ありのままの自分の気持ちに素直になり、またあるがままの社会の現実に対して素朴に目と耳を開かれ、目を注ぎ耳を傾けられるように変えられて行くのではないかと思います。私たちは今日もここから、聖霊によって力付けられながら、歩みを進めて参ります。